

「暗夜に一条の光となる」決意を

茨城県石岡市／魚住農園／本会理事長 魚住道郎



日本有機農業研究会（以下、日有研）は結成から50年を迎えた。日本の有機農業運動の草創期から半世紀に渡って活動を続けてきた会員および同志の皆さんと共に喜びを分かち合いたい。また、これまで支え続けて下さった方がたに感謝申し上げます。

結成から今日までの日有研の活動歴は、別項を参照していただくこととし、これまでの、これからの日有研について述べ、あらたなスタートラインに立つメッセージになればと思う。

一楽照雄（1906～1994）の日有研結成への想い

一楽さん自らが熟慮して書いた「結成趣意書」（94ページ参照）には、当時の危機意識と協同組合畑で生きてきた経験と反省が強く意識され、書き込まれている。

農薬や化学肥料で酷使されてきた農地の疲弊からの回復の必要性、農民自身の農薬被害、残留農薬による消費者への健康被害及び河川や海洋への汚染に近代農業が大きく関与していることに気づき、本来ならかつて全国農協中央会（以下全中）の常務（1958～1965）であった自身が、全中に働きかけ、農協の本来の活動にすべきとの想いはあったようだ。しかし、所詮無理なことはわかっていると断念。個人として共鳴者の参加を呼びかけ、1971年10月17日、全国組織として有機農業

研究会を設立した。

奈良県五條市の医師梁頼義亮（1920～1993）やなせりょう 農薬の健康への害を早くから警鐘。創立時の本会幹事）が全国的運動の必要を強く訴えたことが引き金になったそう。そして、「農民の2割から3割が有機農業に目覚めれば、農協の体質も変えられる。やはり下から変えないといけない」と語っている。

有機農業運動は世直しのための入口

その一楽さんは、「私が有機農業を始めたのは、日本の農業政策を否定し、本来の農業をやらないといけないと考えたからです。間違っているのは農業だけではない。人間の体と心を侵すのは世の中全体がおかしなところからで、必要なのは世直し運動だと思っている」

「有機農業運動はわかりやすい問題の一つで、これは一般の人たちが世直しのために立ち上がる最初の入口だと思っている。安全な食糧もへの関心に始まり、農薬や化学肥料を使わない農業の意味に気づき、さらに身近な洗剤の問題に取り組み、そして原発反対運動に参加する。こうした行動をともなった自覚の過程に真の自立があり、そこに互助の精神が加わって、本物の世直し運動になると思っている」と述べている。

「提携」に込められた協同組合の精神

戦前の産業組合中央金庫、戦後の農林中金、全国農協中央会、協同組

合経営研究所の経歴が示すように、「協同組合とは何か」を常に模索され、説いた。

協同組合の目的は、組合員個人の利益、直接的で単純な組合員の利益を追求するのではなく、むしろ、公正なる社会の実現を目的とするところに本質的な意義があるとし、その実践として、生産者と消費者が提携して、直接的には商業資本の支配から脱出し、間接的には産業資本から独立することをめざす闘いだと考えていると私たちに明解な道筋を示されている。

さらに、農民は商品として販売するために生産するのではなく、自らの消費と農地を持たない非農民を養うという目的に立ち、生産者と消費者との提携のもとで生産し、消費する形態にすれば、生産の方法も今日のような工業製品たる農業資材に依存することからまったく脱却した有機農業に変わる。

日有研は有機農業運動の中心軸に「楽さんが提唱した「自立と相互扶助」の精神を宿す生産者と消費者の「提携」を据え、今日までブレずに実践的に実証してきた50年の歴史であったと言える。

私たちの「提携」とは「TEIKAI」として、世界の有機農業が認証と世界的物流の流れにのみ込まれることなく、小規模な農民と市民層に支持され、今日あることは誇りにしてよいと思う。肝心なのは足元の



(楽照雄書)

日本で、「提携」が世代交替期にあることもあってか、商業的、ビジネス勢の攻勢の前に、残念ながら伸びが止まっていることだ。

表示規制やJAS有機の認証制度の現行下で、現場の有機農家はどこに活路を見出すべきかという選択を迫られてきた歴史が今日まで続いていると言つてよい。そして、どうしても認証を必要とする生産者を守る立場で、内部議論を重ねた末、登録有機認証

機関としてNPO有機農業推進協会を日有研の外に作った経緯がある。

この50年の劇的事象

多国籍企業による遺伝子組換え作物と今後増えるであろうゲノム編集による生物界の遺伝子汚染、近代畜産由来の人畜共通感染症の拡大と家畜大量殺処分、新型コロナウイルスのパンデミック、地球温暖化による気候変動と異常高温、熱波、旱ばつ、大洪水、山津波の発生、山火事、作物の生育障害や病虫害拡大、巨大地震による自然災害の激化、福島第一原発事故による放射能災害と汚染、生物の多様性の喪失など、枚挙にいとまがない。

「みどりの食料システム戦略」への対応

今年の5月、国は「みどりの食料システム戦略」を出してきた。有機農業への大転回を目指すものかと思いきや、カーボン・ニュートラル、デジタル化、イノベーション、グリーンなどの横文字の表現の陰でCO₂を排出しないクリーンなエネルギーとして、原子力を20～22%は維持するとしていて、福島第一原発事故の反省などまったくない。

また、表示義務もないゲノム編集作物やRNA農薬、AIによる無人トラクター等の導入も入っており、有機農業より近代農業のさらなる推進と見てよい。

2050年までに耕地面積100万ha、耕地面積の25%を目指すとしている点は、良しとするしかないが、どうやって、その担い手を確保し、育てるかの提案は具体性を欠いている。

日有研の実践に光が当たるとき

日有研では、〇〇有機農学校と称し、アドバイザー有機農家が受講生を受け入れ、講座を開いてきたが、25%、100万haを30年内に本気で目標達成するには、各県に、最低1校ぐらい有機農業の専門学校や有機

農業公園を作るべきである。また、その教員、講師を育成する必要がある。日有研50年の有機農業の実践的農業技術や、消費者の生活改善の取り組みの蓄積は、きつとそれらの事業に貢献できるはずだ。

小・中・高の教育の中にも有機農業の世直し教育を入れていけば、国連のSDGsの呼びかけにも即応できる。

発達障害、がん、難病などの発生率が年々増加傾向にある。生殖機能も低下しつつある今日、一楽さんが50年前に感じていた以上の危機が現実のものになっている。

「有機農業運動は世直しのために立ち上がる最初の入口だ」との一楽さんの遺言を反芻し、「暗夜に一条の光となる」決意を固めよう。

日本有機農業研究会に出会った幸せ

千葉県佐倉市／林農園／本会副理事長 林 重孝



篤農家と呼ばれる農家に生まれて

日本有機農業研究会が1971年に設立され、この10月で50年になる。有機農業を始めて42年（住み込みの研修1年を含めて）になるが、研究会と共に歩んできたと思える。

わが家は代々の農家で、父は人一倍研究熱心であり、バスで全国から多くの人が見学に訪れるくらいの篤農家であった。農業試験場のようには区割りをして、化学肥料の窒素、リン酸、カリの配分を変えて与え、できたイモの肥大率を毎年調査したりしていた。そんな父を見て農業を継ぐと大学は農学部を選んだ。

大学時代、朝日新聞に有吉佐和子（のちに有吉佐和子さんのご自宅を金子美登さん研修時の配達で時々お邪魔することになる）の『複合汚染』の連載が始まり、福岡正信『わら一本の革命』が出版された。当時は有

機農業という言葉は使わず、無農薬、農薬を使わない農業といわれたと思うが、そういう情報が話題になってきた。

特に不耕起、無農薬、無肥料、無除草で米、麦の連続栽培、米は16俵収穫できる『わら一本の革命』に衝撃を受け、著者の福岡正信さんに手紙を書き、大学3年から4年になる春休みに2週間愛媛の農場を訪れた。実は就農して2年間、自宅の水田で取り組んだがうまくいかなかった。

東京に戻ったのち、福岡さんのところを知り合った人に農協ビル（当時は大手町にあった）でミミズの勉強会があるから参加しないかと誘われ参加した。この勉強会が日本有機農業研究会の月例会で、一楽照雄さんに初めてお会いした。勉強会の帰り際、女性に日本有機農業研究会に入りなさいと言われ、すぐに入会した。この人が、のちのち私が住み込みの研修を受ける金子美登さんの奥さんになる友子さんであることを後で知ることになった。

研究会の存在は『複合汚染』で知っていたが、研究者が入れる会で、

学生が入れるとは考えてもいなかった。設立5年目の1976年に入会した。

大学サークルで農業問題を調査

大学ではサークル「農業問題研究会」に入会した。農業問題はあくまでも現場の農村にあり、毎年テーマを決めて農村に行つて調査をした。2年生時のテーマは「地域開発と農業」で調査地を静岡県富士市にした。富士市は浜松市に次いで静岡県第2位の工業都市で、特にパルプで有名である。近くに工場が多数でき、農業がでにくい状況になっているのではないかとという想定である。農業問題研究会としての大きなテーマは持ちつつ、それぞれ、協同組合、女性問題、農業経営など個人テーマも持ちながら調査をした。

調査は、事前調査は別として現地では農家に泊まり、農作業をしながら経営調査など3泊、農家へのアンケートの配布・回収、行政・農協などのヒヤリング調査、婦人部との懇談会など公民館に4泊の合計7泊であった。現地調査終了後、大学に戻って集計・分析し、取りまとめたところ、想定していた結論とはまったく違う結果が出た。

工場の進出によって農業がしにくくなっているのではなく、それに伴う新住民による新興住宅の拡大によって農業がしにくくなっている状況が明らかになった。工場は規制が厳しく、操業時間、騒音、排水などは農家が困るほどではなく、近くに新しい住宅ができたために、早朝の機械を使つての作業ができない、農薬の散布も風向きを考慮しなければならぬといったことが起きていた。また、生活雑排水が水田を汚染していた。

結局、通常だと調査は1年で終わりののだが、想定外の結果で、次年度も富士市を継続して調査することになった。私は、農薬を使わない農業に関心があり、新住民との融合も模索できないかと、農家には「新しい住宅が増えたために農作業がしにくくなったか」「できた農産物がど

のくらい高ければ農薬を使わないで農業をしてみたいか」など、近くの新住民には「近くの農家が農作業して困ったことはないか」「何割くらいまでなら高くても農薬を使わない農産物を買いますか」などのアンケートを行った。

秋には2年間の報告書をまとめた。農林中金に調査部（現農林中金総合研究センター）があつて、われわれ学生の報告書も蔵書として保管してくれる。友人と二人で届けたが、この時対応してくださったのが、荷見武敬さんと鈴木利徳さんで、お二人とも有名な方で、すでに有機農業の本を書かれていることは後で知った。

われわれの報告書を手にとり、軽く目を通し、私の「農薬を使わない」が目を引いたらしく、読んでくれた。そして、埼玉県小川町に金子美登という人がいて、消費者と1年半勉強会を行い、契約を結んで有機農業をしているから一度訪ねてみるといいとアドバイスをくださった。このときは、のちのち研修に行くとは考えてもいなかった。

金子美登さんの最初の住み込み研修生に

大学を卒業してすぐに就農した。家では両親がしていたサツマイモとヤマトイモの作業を行った。2年間作業をしたが、疑問に思うことが出てきた。サツマイモもヤマトイモも、ある時期にすべて収穫し、冷蔵庫や温蔵庫に入れて保存する。それを市場に出荷するときにヤマトイモは漂白し、サツマイモは発色剤に漬けて出荷する。作物の生育過程で病害虫を防ぐために農薬を使用し生産量を確保することはわからないわけではないが、見栄えを良くして商品価値を高めるため薬品に漬けることは本当に必要なのか。

野菜は新鮮であるとか、おいしいとか栄養価があるとか多様な要件があるが、最も基本である安心、安全がない。極端な言い方をすると、野菜の中にどんな毒があろうと少しでも高く売ればいいというのが、今の農業だと実感した。単にお金を儲けるための農業なら、一生かけてす

るほど価値のある仕事なのか。お金を儲けるための仕事ならあえて農業をすることはしない。

こう思ったとき、農業をするなら別の形の農業をしようと考えた。そのとき浮かんできたのが、在学中に農林中金調査部で教えていただいた金子美登さんのことであった。

昭和53年秋、住み込みの研修をお願いしに金子宅を訪れた。当時は、だれも住み込みの研修生を受け入れていなかった。私はその時、住み込み研修は引き受けられないと言われても、車に寝泊まりし、へばりついてでも研修を受けようと考えていた。ところが、一緒に勉強しましょうと快く引き受けてくださった。

現在、金子さんの研修の卒業生は外国人も含め数百人以上いるが、研修生の後輩に「林さんがその先駆けになってくれたから、私たちがいる」と言われると胸が熱くなる。

有機農業は顔の見える「提携」こそ永続性があり

研修を終えた後、実家に戻り有機農業を始めたが、消費者を見つけよ

日有研と私——『土と健康』の記事に励まされて——

群馬県高崎市／滝の里農場／本会副理事長 大塚一吉・とみこ

1984年、まだ東京でサラリーマンをしていた時に、日本有機農業研究会の会員になりました。高崎の実家は農家でしたが、私は農業をするつもりはまったくありませんでした。当時私たちは子育て真っ最中で、子どものアレルギーがひどかったことから、妻は安全なものを食べさせ

うと日本有機農業研究会の事務所を訪ね、近隣の消費者らしき人の住所を教えていただき、一軒ずつ訪ね、「これから有機での野菜を作るから食べてくれませんか」と声をかけ、セット野菜を自分で配送し、玄関まで届ける提携が始まった。また、研修中に知り合った消費者グループから声をかけられ、注文で専従の職員が取りに来て消費者に届けるやり方も始まった。こちらは直接消費者と顔を合わせる機会は少なく、しばらくして自分で配送する形に変えた。

慣行農業の両親は外観重視の市場流通であったが、有機農業は消費者と顔の見える「提携」こそが永続性があつて安定している。今後有機農業は「提携」を基本として発展していくであろう。

毎月開かれる研究会青年部の会合には必ず出席した。近隣に有機農業者はまったくおらず、常に孤立しがちな自分に勇気を与えてくれた。1993年常任幹事になり、NPOになってからは理事になり27年間役員を務めてきた。長くやりすぎたかもしれない。後進の活躍を見守りつつ、生涯現役を貫こうと思う。

たいと、野菜などの共同購入をしていました。それがきっかけで日有研を知りました。

会員になり、会誌『土と健康』を読む中で、耳慣れない「一楽」というお名前の方の言われていることに大変共感しました。代々百姓の長男

として生まれ、どの時代でも百姓は搾取され続けていると認識し、親の大変さも見ていたので、一楽照雄さんの言葉は私にとって大変重みのあるものでした。私は日有研の「結成趣意書」を何べんも読み、就農への気持ちが高まってきました。

そしてある日、日有研事務所に就農相談に行った私に、事務局の築地文太郎さんが丁寧に優しい眼差しで相談にのってくれ、小川町の金子美登さんを紹介してくれました。金子さんからは、当時の私の自宅（清瀬市）に近い田中和義さん（田中農園）を教えてください、週末のみの研修生として田中さんに1年間お世話になることになりました。

自転車です5分の田中さんとの出会いは大変幸運でした。当時田中農園では、泥付き野菜を畑で直ちに単品ごとに袋（米袋などを利用）に詰め、消費者グループの拠点に直接届けるという画期的なやり方をしていました。待っていた会員が届いた野菜を仕分けします。消費者グループの皆さんが田中さんを支えている様子を、配達に同行し見ることができました。

1986年に私たち家族は高崎にもどって就農し、地元の消費者に農産物を直接届ける「提携」を始めました。当時、有機農業生産者はまだまだ少数派で、毎月届く『土と健康』誌上の生産者や提携消費者の記事に励まされたものでした。



当時は、群馬では日有研会員が100人近くいて、交流も活発で食や環境問題に意識が高い人たちがこの会に結集しているという感がありました。日有研の結成時に医学の面で協力された群馬大学の食物アレルギーの権威、松村龍雄先生も群馬県地域会員集会にはいつも参加されていました。先生の生産者に接する優しい姿と、生産者と共

短歌 とみこの日々

狭き道向こうは大型高級車
こちら軽トラ迷わずバックす

神よりの配慮なるべし朝曇り
夏の農家は畑に急ぐ

人生を諦めたのか挑むのか
ともかくにも私はベリーショート

嫁さんが髪をばっさり切ったから
一寸不安がよぎったよ息子よ

老いの身に効く農繁期目覚めれば
厨ゆ夫の口笛聞こゆ

春夏を好みし吾が秋冬を
待つ人となる農に嫁し来て

にいる時の先生の楽しそうな姿が忘れられません。医療の現場から農薬への警鐘を鳴らし続けておられる青山美子先生は、群馬大学医学部の後輩にあたります。

2000年前後、有機の基準認証問題が出てきたころ、提携生産者の間でも動揺が広がりました。そのころ日有研もNPO法人となり、久しぶりに全国大会に参加した私は、会の運営メンバーも変わり雰囲気も変わってきたように思いましたが、私の日有研への思い

は変わらず、2016年の群馬での全国大会では、実行委員長を務めました。その後、理事となり3期目になります。

現在、会員は年々減少傾向にあり、若い会員もなかなか増えない状況です。日有研は有機農業運動を主に活動してきましたが、運動だけではなく同時に有機の生産者が増えるような支援策を打ち出していくことが肝要かと思えます。そのことが農業や化学肥料の削減につながり、現在の環境危機への手立ての一つになると思います。